

全校のみなさん、おはようございます。

来月の八日に、伊那西高校の釈尊降誕会が行われます。お釈迦様の誕生をお祝いする日でもあります。そのことを通して、私たちが自分の「いのち」というものに目を向ける日でもあります。

ところで、入学式の時にはちょうど見頃だった学校の桜も、その花は散り、すっかりと緑に色が変わってきました。「ついこの間まで、あんなに綺麗に咲いていたのに：」という思いが、どこからともなく、私たちの胸に去来します。それは、華々しく咲き誇る満開の桜こそ、本来の桜の姿であるかのように心のどこかで思っているからではないでしょうか。

しかしながら、花が散ろうが葉が枯れ落ちようが、どんな時でも桜は桜として変わらなはずです。私たちは綺麗に咲いている時にだけ桜の価値を見ようとしますが、桜のいのちそのものの価値は、どんなときでもどんな見た目になろうとも変わらないはずです。

金子大榮（かねこだいえい）という浄土真宗の僧侶は、次のように述べられました。

花びらは散っても花は散らない

形は滅びても人は死なぬ

（『意識歎異抄』より）

満開の桜にこそ桜の価値を見ようとするように、人間に対しても、私たちは同じような見方をしてはいないでしょうか。つまり、その人に周りより優れた部分があるかどうかで価値を見たり、人間が若々しく元気であるかどうかに価値をみたりしようとする、相対的な見方です。

お釈迦様は誕生のときに「天上天下唯我独尊」と宣言されたという有名な話があります。ある先生は、「天上天下」を「いつでもどんなときも」、「唯我独尊」を「何も付け足さなくても誰と比べなくても私は私として尊い」と、この言葉の意味を読み取られました。

普段、さまざまな人や物との比較の中から、その価値を見ようとする私たちに、大切な問いかけをしてくださっている言葉です。